

学生会館解体顛末記

文責：百武直志

1.はじめに

2004年12月5日をもって学生会館はその30年にわたる歴史に幕を閉じた。天文研は学生会館の7階BOX718に部室を持っていたため、この影響を受けて部室を失い、実に30年振りに部室を持たないサークルとなった。本稿ではどのような顛末で学生会館が解体されることとなったのかを記録として残しておきたい。

2.解体までの経過

事の発端は2003年8月13日に学生会館ホール棟地下において、煙草の火の不始末によるものと思われる火災が発生したことから始まる。2001年度から学生会館では火災が頻発しており、さらに同年4月には近傍の市ヶ谷体育館にて、空手部の煙草の火の不始末によって大規模な火災が発生し、体育館が4ヶ月にわたって使用不能となってしまう事態も起こっていた。

このように学生が原因による火災が頻発するため、大学は学生会館の夜間使用禁止を打ち出した。これまでも名目上は23時以降学生会館は使用禁止であったが、近年では有名無実化していたことは周知のとおりである。しかし、2003年後期から始まった学生会館の夜間使用禁止は、23時以降に入り口に警備員を配置するという思い切ったものであった。これに対して中核派や学生会館学生連盟を中心とした一部の人間が反発したが、大部分の学生は容認した。

後期が始まり夜間使用禁止が始まったが、学生の間では事実上の夜間再入館禁止と同義であった。というのも、23時以降警備員が入り口に配されるも入館しようとする者を静止するだけであり、退館者に対しては何もしなかったからである。従って学生会館の外に出なければ従来通り23時以降もいることができるシステムであった。天文研でも一部の人間が23時以降も屋上で惑星等を見ていた。

このように早朝の退館者が続出するような事態が次第に表面化してきたため、同年12月に警備員の館内巡回が始まった。これによって完全に学生会館は23時以降利用することができなくなった。これと平行して学生会館学生連盟は夜間利用再開の交渉を学生部と開始。加盟本部団体を通じて各サークルにアンケート等を実施した。

夜間利用再開の交渉は、許可制・申請性という方向で学生部との折り合いが付き、細部の調整を経て2004年5月から実施される予定であった。ところが、2004年4月20日未明、学生会館BOX310の空手部のBOXから火災が発生。火はBOXの半分を焦がしたところで警備員の手によって消し止められた。原因はBOXに設置された、TVのプラグとコンセントとの間に堆積した埃が電気スパークによって点火される「トラッキング現象」であった。2度の火災の原因となった空手部は、この火災後、学生部長の抗議によって全員退部処分となり、消滅した。

この火災の影響によって、同日より学生会館本部棟は立ち入り禁止となった。荷物の搬出入のみが警備員の同行によって可能であり、自由な立ち入りは制限された。火災後行わ

れた麹町消防署の査察によって、嚴重な警告を受けた大学は5月中旬に学生会館の全てのBOXに対して、防災対策の実態調査を行った。この間学生会館学生連盟は全く機能せず、第二文化連盟と学生団体連合を中心として、有志のボランティアによる「防災対策本部」が発足。学生部との学生会館使用再開にむけての交渉と、荷物搬入時の受付等の業務を行っていた。

この異常事態は同年7月13日に行われた「全学説明会」によって急変を迎えた。18時30分より511教室で開始された全学説明会で、大学は学生会館の解体を発表。2006年をめぐりに学生会館の跡地に、学生厚生施設と教室の機能を兼ね備えた複合施設を建設すると発表した。学生の間で懸念されたのは、BOXがこの新施設に備わるのかという点であったが、大学は新施設にはBOXを作る予定はないと発表。会場は一時騒然となった。大学が挙げた理由として、BOXの使用状況の劣悪さが挙げられ、実際の使用状況を写したスライド等が上映された。結局、各BOXの防災対策の悪さと学生の管理行き届きを主たる理由として、新施設にはBOXが設置されないとのことであった。

その後、代替施設の引越スケジュール等が発表されたりした。「つみつくり」「中核派」を中心とした一部の学生の怒号が飛ぶ場面もあったが、大半の学生は静かに大学の説明を聞き、質疑応答も感情的になることなく冷静な口調で淡々と行われた。質疑応答の後半は中核派が不毛な議論を始めたため、帰る学生も出てきた。天文研では3年生の3人と不可避の事情がある者以外は全員参加していたが、説明会が水掛け論の様相を呈してきた頃を見計らって、焼肉屋「韓火炉」へと移動した。

この説明会の結果、天文研をはじめとする学生会館本部棟にBOXを持っていたサークルには、その荷物の規模に応じてホール棟にそれぞれスペースが与えられることが伝えられ、8月前半までに引越を完了する旨が伝えられた。天文研はホール棟41番会議室に鉄道研究会と共同で荷物を置くこととなった。天文研の引越は7月20日に行われた。幾度となく行われた観望会での荷物搬出入の経験によって、引越作業は遅滞なく行われ、3時間後には必要最低限の荷物のみがホール棟41番に収まった。閉鎖前までは学生会館で最も整理が行き届いたBOXとして有名だった天文研のBOXも、引越後は略奪に遭った後のように荒れ果てた様相を呈していた。

BOXに入れる最後の日となった8月6日、30年にわたって数多くの人間が青春を謳歌し、天文研の活動の場となったBOXの内部を撮影し、扉に掲げられた「法政天文研究会」のプレートを外した。同日、学生会館本部棟の全ての引越が完了し、本部棟は完全閉鎖され、防災対策本部は解散した。

9月上旬、本部棟の解体工事が始まった。図書館テラス・ボアソナードタワーなどからその様子を見ることができた。ユンボ数台が本部棟屋上に運ばれ、上部から解体してゆく工法であった。解体工事に伴ってキャンパスを横断する壁ができ、ホール棟とその他の校舎との行き来が非常に不便になった。ホール棟は学生証と、あらかじめ学生部から交付された「学生会館入館証」を提示し、入館者名簿に所属・氏名・学籍番号・利用室名を記入して入館する手続きを踏まなければ、入館できなかった。天文研のように倉庫として会議室をもらっている場合は、さらに鍵貸し出しの申請をしなければならなかった。ちなみに、荷物の少ないサークルは、小さなパイプカーゴを支給されていた。

本部棟の解体工事が進み、BOX718のあった場所が空っぽの空間となってしまった10月、ホール棟から旧通信教育棟・62年館への2次引越が始まった。天文研は旧通信教育棟の一角に鉄道研究会と共同で倉庫を与えられたため、そこにホール棟から荷物を移動する必要があった。10月6日、他のサークルに先駆けて引越が行われた。3年の倉重氏が自家用車を用意し、それを利用して一気に運ぶ算段であった。そのため引越は18時から行われた。引越は2時間程度で終了した。学園祭に使う以外の荷物は全て旧通信教育棟と62年館地下に設けられたロッカーに運び込まれた。ホール棟41番は以後、学園祭用の準備スペースとして使用され、主にプラネタリウムの制作に使用された。同時期、学生会館学生連盟の解散決議案が学生の間で提起され、翌11月13日の総会によって学生会館学生連盟の解散が正式に議決され、同日をもって連盟は解散した。

11月19日午後、学園祭の開催に伴って全ての荷物が41番から運び出された。学園祭はBOXが使えないというハンデを背負ったにも関わらず、天文研の企画は過去に類を見ない盛り上がりを見せた。学園祭終了後、学生部との折衝によって新たにボアソナードタワーB1駐車場にパイカーゴを1台支給され、ここに学園祭関連の荷物を納めた。2004年12月5日 学生会館ホール棟の使用期限が終わり、解体工事が始まった。既に本部棟は1階まで解体されており、往時の姿は見るべもなかった。この日を持って学生の学生会館利用は終了した。1974年の実力入館以来30年にわたってサークル活動の中心として利用された学生会館は惜しまれながら解体されたのである。

3.BOX718

1974年以来天文研は学生会館本部棟7階にあるBOX718を使用してきた。30年の間に数々のドラマがそこで生まれた。ここに思い入れのあるOB諸氏も多いと思う。2002年に扉の塗り変え、2004年にフロアマット敷設とリフォームを重ね、毎日頃清掃を怠らなかつたBOX718は、近年「最もきれいなBOX」として多くのサークルからうらやましがられた。

このBOXで酒を酌み交わし、鍋を囲み、夜が開けるまで学友と語り明かした日々は、何物にも代え難い青春の1ページとして多くのOB諸氏の胸に刻み付けられていることであろう。この貴重な空間を何代も後の後輩にまで残したかった。

残念ながら、学生会館を利用する学生のモラルは悪化の一途をたどっていた。度重なる盗難、火災、ゴミ箱に吐瀉物を捨てる、女子トイレの男性利用など、むちゃくちゃで瀕死の状態になっていた。来るべきところまで来た、その帰結として学生会館という空間は失われたのではないかと思う。

30年振りに部室を持たないサークルとなった天文研。その興廃は後輩諸君の双肩にかかっている。サークル受難の時代を迎え苦しいところであるが、一致団結、総員励起してこの難局を乗り切って行ってほしい。